リスク管理

リスクマネジメントABC

安全と安心とリスク

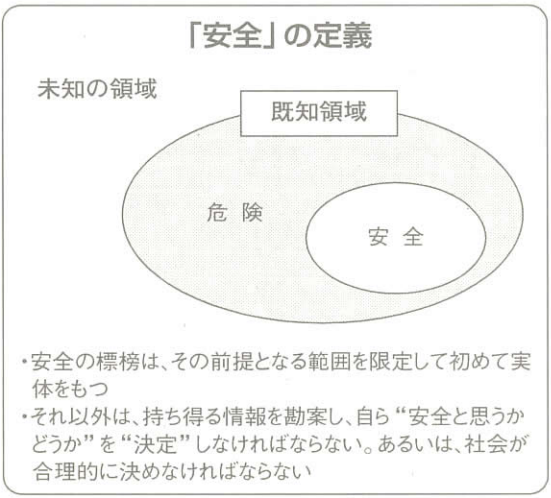
担保は「絶対」ではない

社会の安全・安心に関わるリスクを論じてきた。そのより深い理解のために、今回は安全と安心の関係をリスクマネジメントの立場から改めて考えてみることにする。

一般的に安心は、安全の裏打ちがあって初めて担保される。したがって、〝安心である〟との確信を持つためには、自らが安全であるということを定量的あるいは定性的にでも納得しなければならない。では〝安全である〟という以外の場合とはどのような状況であろうか？

◇

図は、〝安全である〟と論理的・科学的に納得できる説明が得られるのは、我々が何らかの形で〝知識〟〝経験〟を持っている事柄で、それ以外については単に、〝未知の事柄〟であり、従って安全であるとも、危険であるとも、誰も言うことは出来ない、ということを示す。



つまり、世の中の事象は、安全であるか非安全であるかの二つに分けられるのではなく、それ以外にも、実はこれまで経験したことがなかったもの、思っても見なかったことがたくさんあるということである。我々を取り巻く事柄は、まず、〝知らなかったこと〟と〝知っていたこと〟に分けられ、いわゆる「安全」は〝知っていたこと〟の中のみで成立するということである。

〝非安全〟を、被害の可能性のある事象、〝知らなかったこと〟をどのような状態になるか分からないが、重大な被害を受けないとは、決して否定できない事象、というように考えると、これらが、〝リスクとして対象とすべき事柄〟ということになる。

例えば、対象とする地震の強度が想定以上の強さを持ち、その被害が、想定より遥かに深刻になる可能性を誰も否定できない。また、関西は地震に対して安全である、と信じていたことが単なる思い込みでしかなかったことを、我々は阪神淡路大地震という、ただ一度の出来事で知った。それまでの〝安全〟が、ある前提の下で担保されていたのだと言うことを、そうして、〝安全〟であるということを誰かに言ってもらい、〝安心〟していたかっただけなのだったということを自らの反省を込めて知った。これが、今の〝安全〟の実態である。自らの安全を積極的に求めるのではなく、不安な気持ちを、単に回避しようとする方に、社会のあり様があった、ということである。

安心を求める前に、本当に安全と言えるのか、思ってもみなかった不幸な結果が、絶対ないと言えるのか、を素直な気持ちで思い描き、その上で、〝健全な安心〟がもたらされる社会にしたいものである。

（日本総合研究所）
研究事業本部　鈴木 正敏（理事）